

百羽の ツル

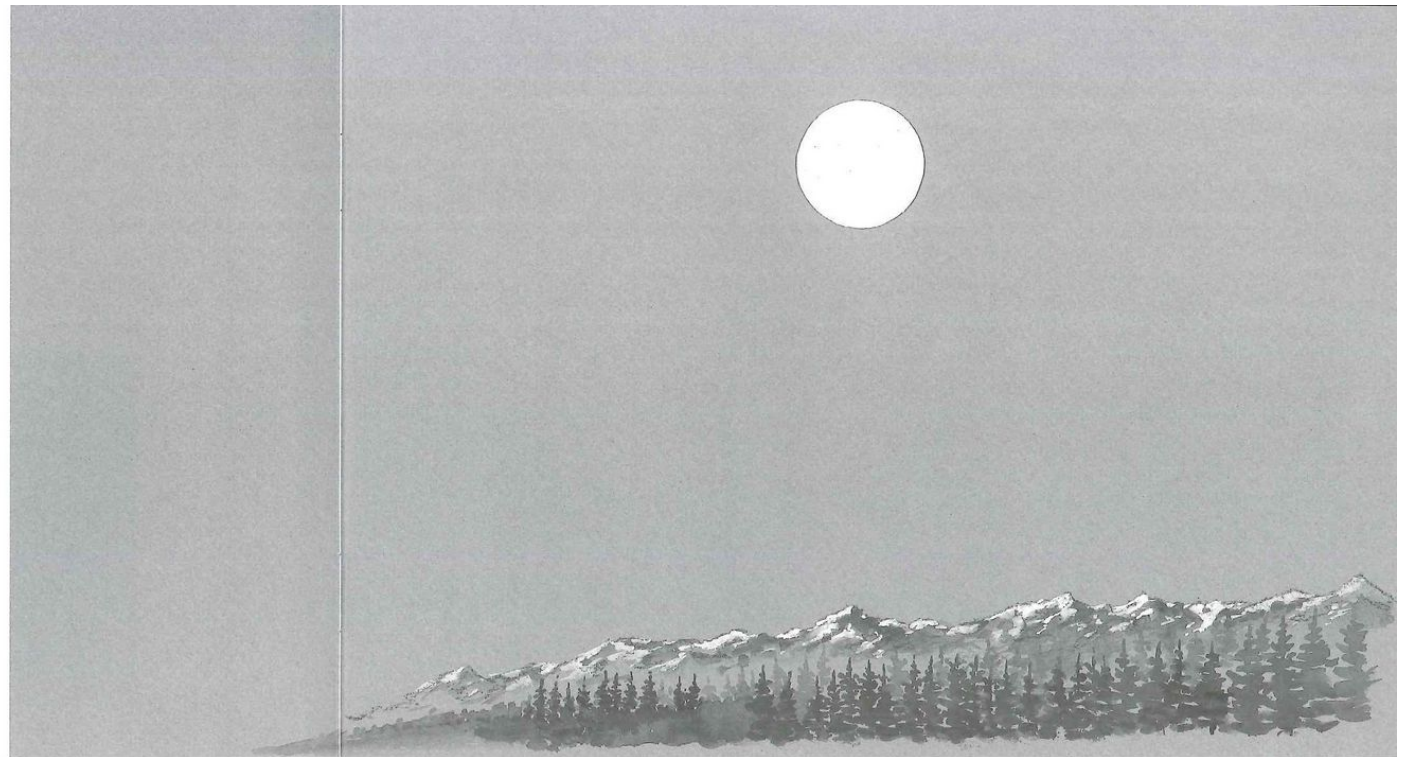
花岡 大学 作
田中陽一郎 画

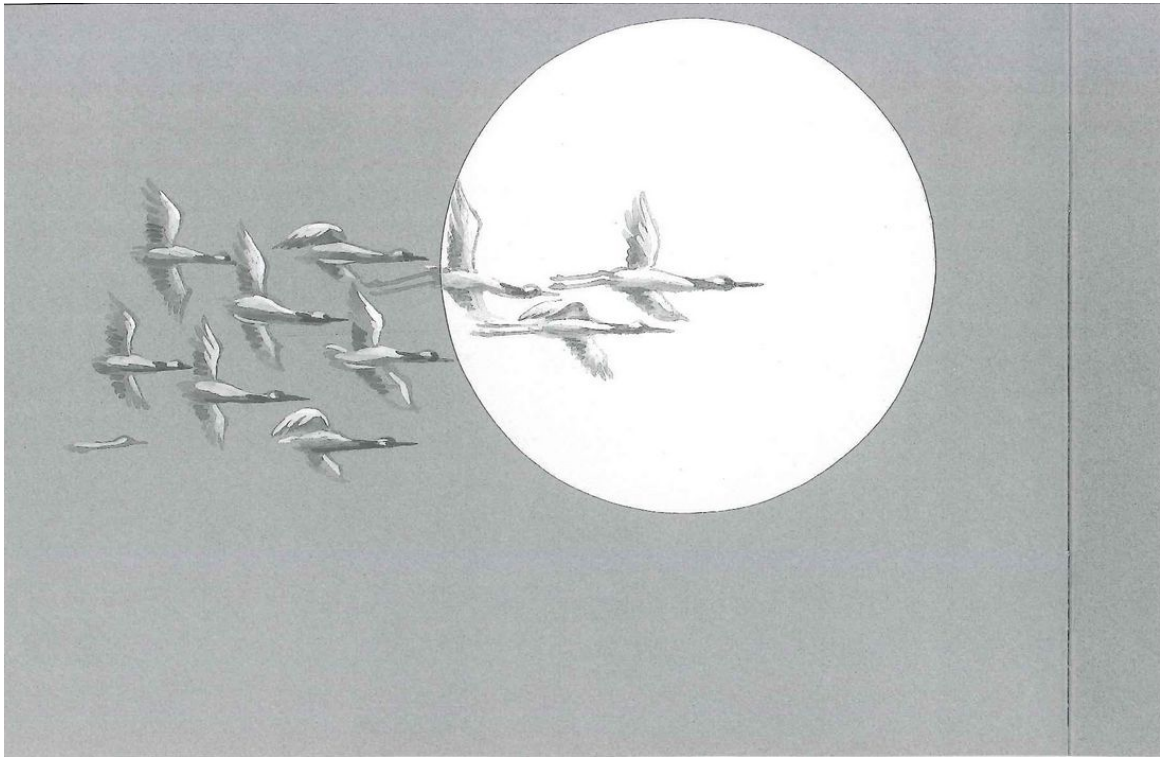


つめたい^{つき}月の^{ひかり}光で、

こうこうとあかるい、

夜^よふけのひろい^{そら}空でした。





そこへ、北きたのほうから、まっ白しろなはねを、ひわひわとならしながら、
百羽ひゃっばのツルが、とんできました。

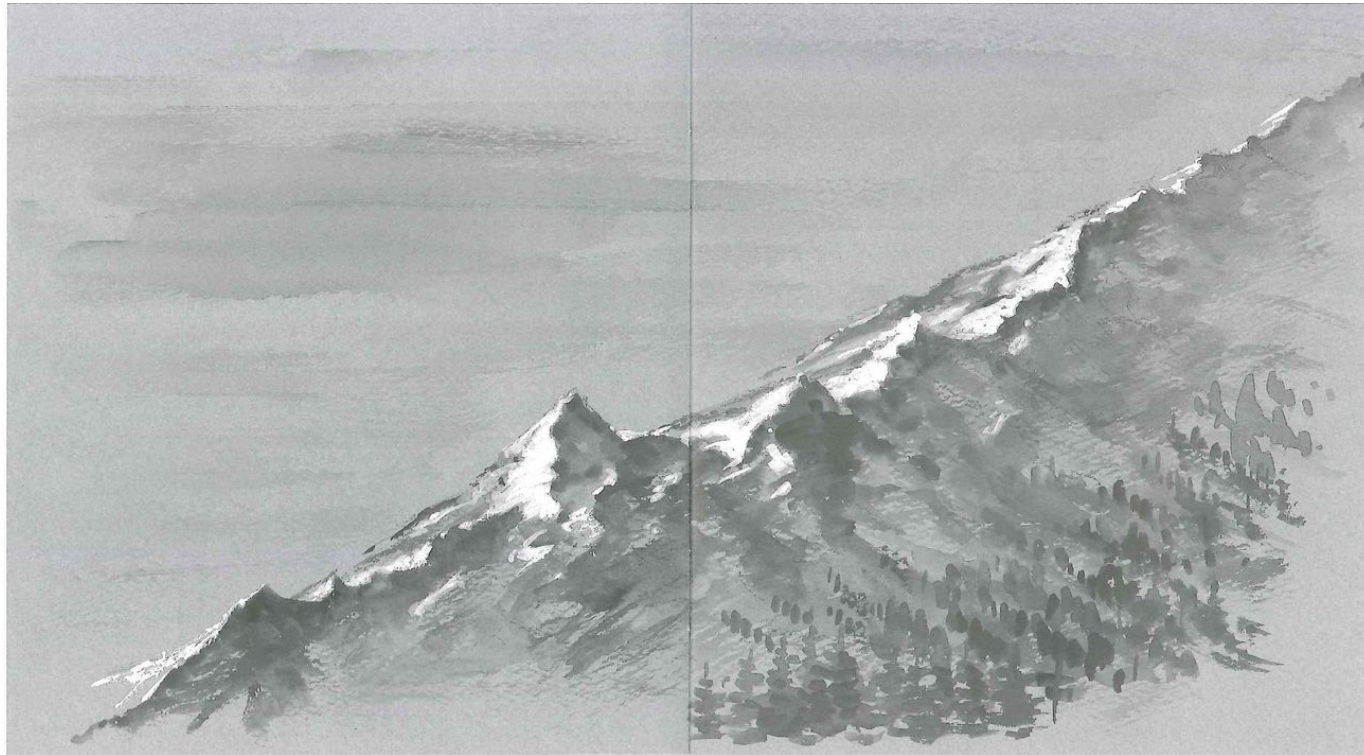
百羽ひゃっばのツルは、みんな、おなじはやさで、白しろいはねを、ひわひわと、
うごかしていました。くびをのばして、ゆっくりゆっくりと、
とんでいるのは、つかれているからでした。

なにせ、北きたのはての、さびしいこおりの国くにから、
ひるも夜よるも、やすみなしにとびつづけてきたのです。

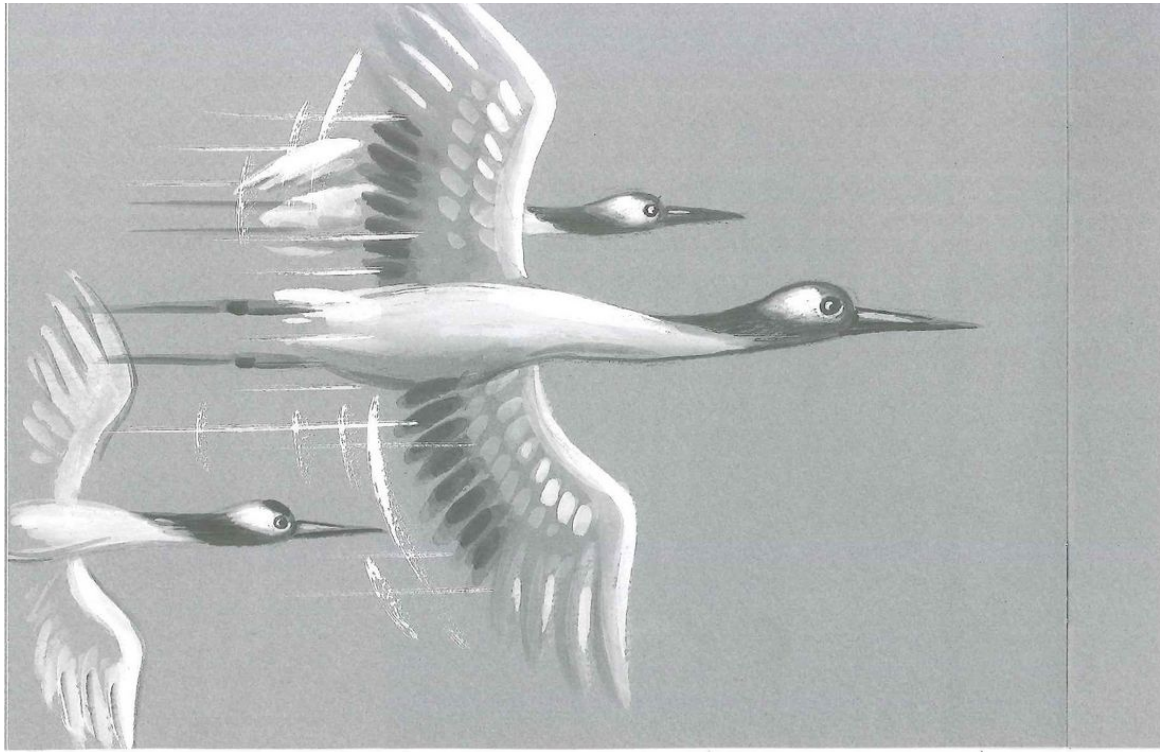
だが、ここまでくれば、ゆくさきは、もうすぐでした。

たのしんで、まちにまっていた、きれいなみずうみのほとりへ、
つくことができるのです。

「^{した}下をごらん。^{さんみやく}山脈だよ」
と、^{おお}せんとうの大きなツルが、
うれしそうに、いいました。
みんなは、いつきに、
^{した}^み下を見ました。
くろぐろと、
いちめん^{だいしんりん}の大森林です。



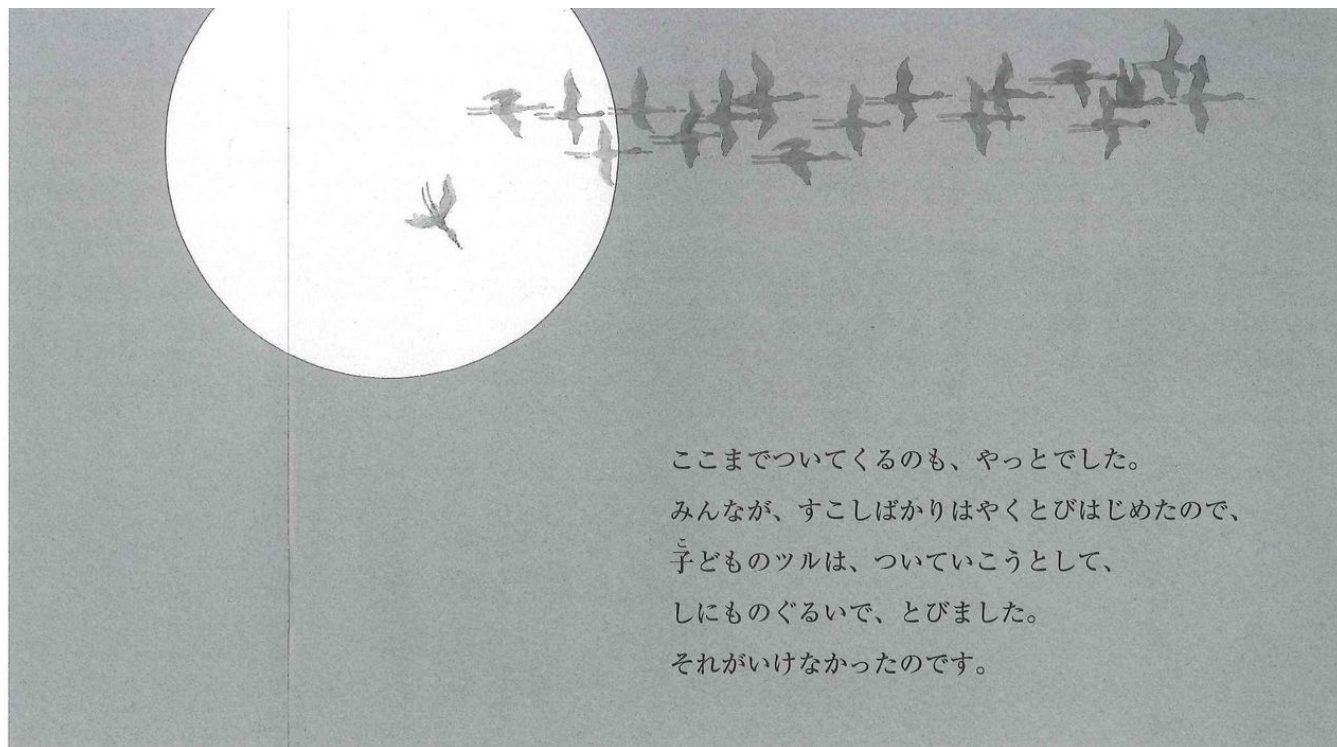
^{ゆき}雪をかむった、
たかいみねだけが、
^{つき}^{ひかり}月の光をはねかえして、
はがねのように、
^{ひか}光っていました。



「もう、あとひといきだ。みんな、がんばれよ」

^{ひゃっば}百羽のツルは、^め目を、キロキロと^{ひか}光らせながら、つかれたはねに、
ちからをこめて、しびれるほどつめたい、^{よる}夜の^{くうき}空気をたたきました。
それで、とびかたは、いままでよりも、すこしだけ、はやくになりました。
もう、あとが、しれているからです。
のこりのちからを、だしきって、
ちょっとでもはやく、みずうみへつきたいのです。

するとそのとき、いちばんうしろからとんでいた、
小さな子どものツルが、下へ下へと、おちはじめました。
子どものツルは、みんなに、ないしょにしていたが、
びょうきだったのです。



ここまでついてくるのも、やっとでした。
みんなが、すこしばかりはやくとびはじめたので、
子どものツルは、ついていこうとして、
しにものぐるいで、とびました。
それがいけなかったのです。



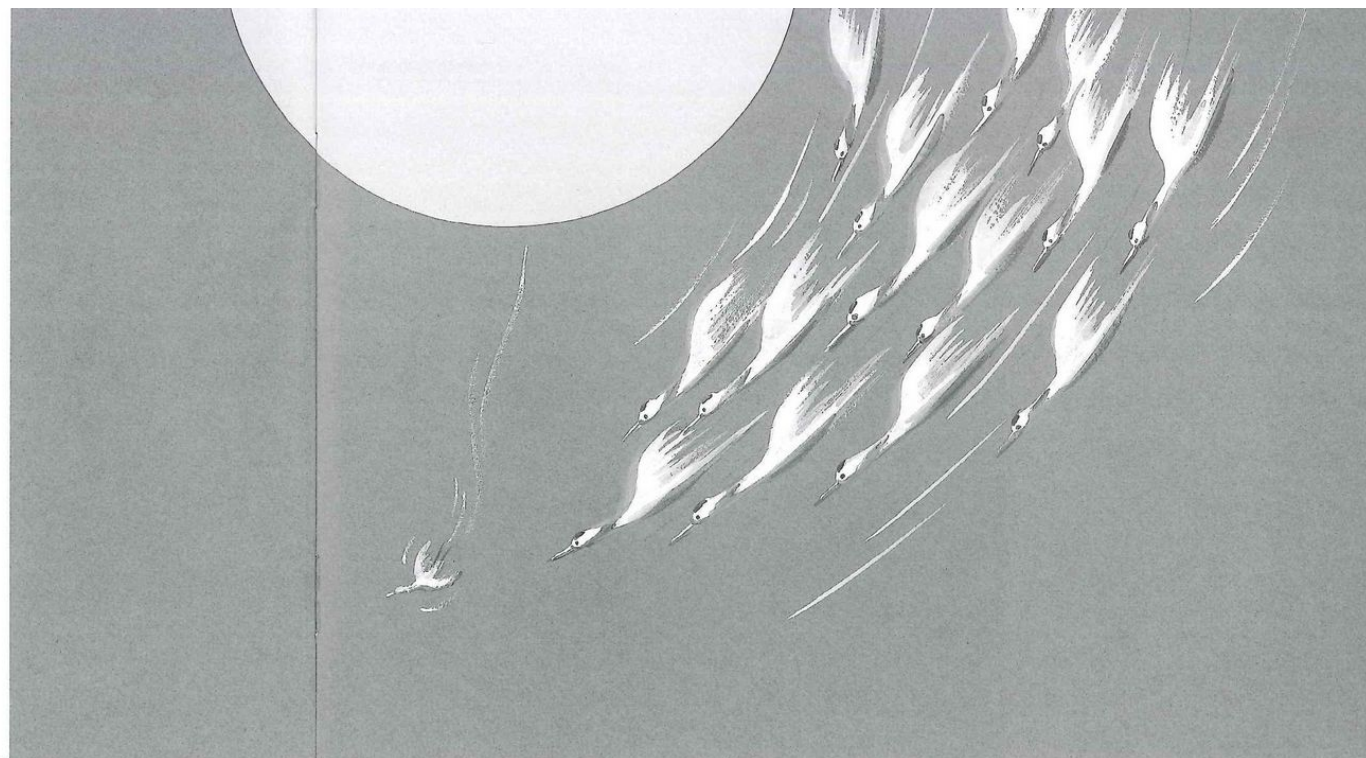
あっというまに、はねが、うごかなくなっていまい、
すいこまれるように、^{した}下へおちはじめました。
だが^こ子どものツルは、みんなに、
たすけをもとめようとは、おもいませんでした。
もうすぐだと、よろこんでいる、みんなのよろこびを、
こわしたくなかったからです。
だまって、ぐいぐいとおちながら、^{ちい}小さなツルは、やが
て^き気をうしなっていました。

子どものツルのおちるのをみつけて、そのすぐまえをとんでいたツルが、するどくなきました。

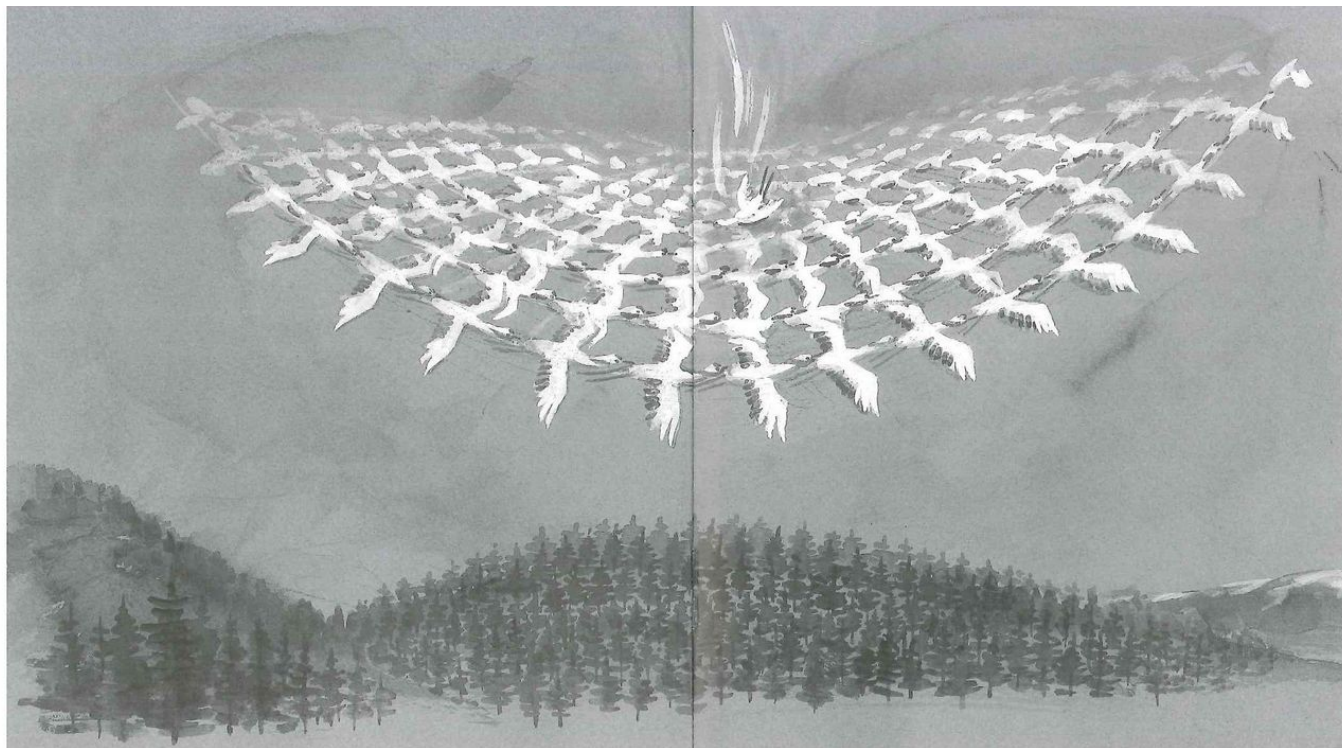
すると、たちまち、たいへんなことがおこりました。

まえをとんでいた、きゅうじゅうきゅうわ九十九羽のツルが、いつきに、さっと、したした下へ下へとおちはじめたのです。

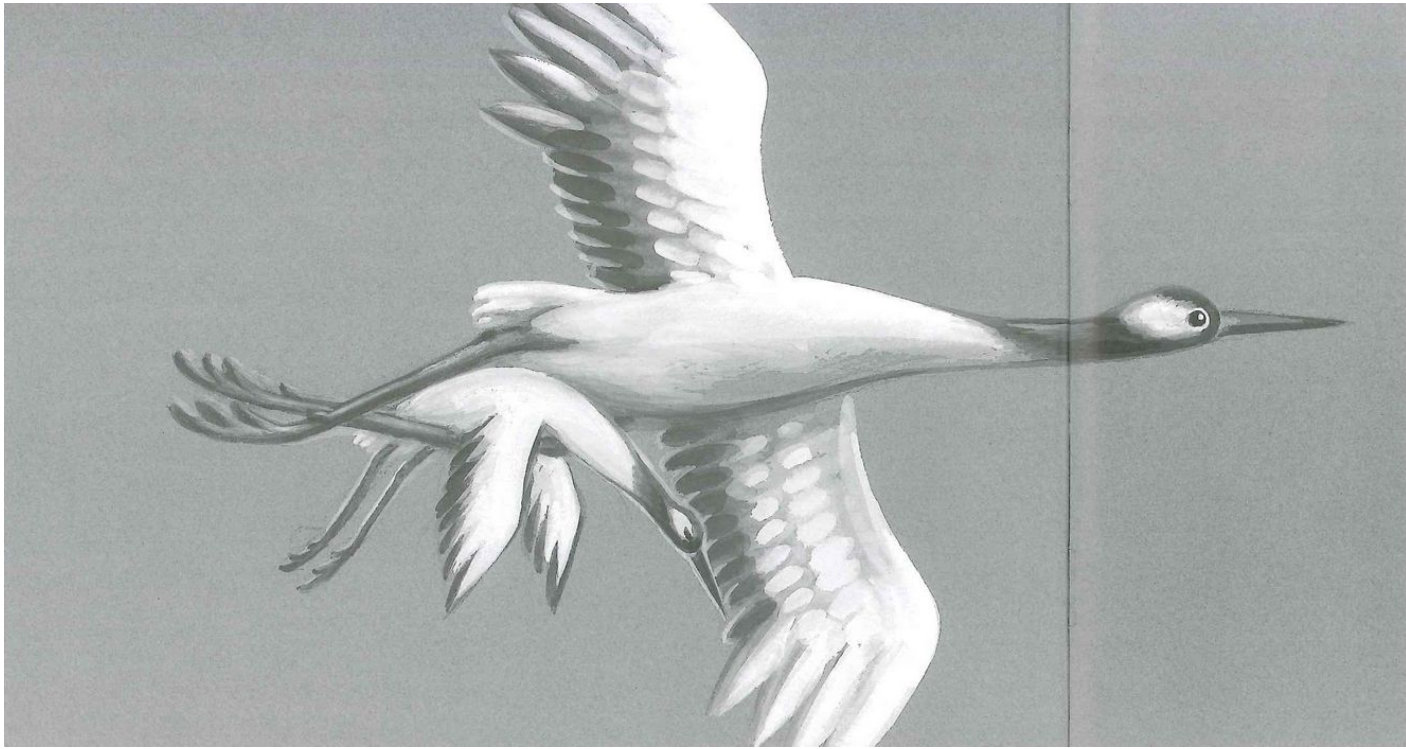
子どものツルよりも、もっとはやく、つきひかり月の光をつらぬいてとぶ、ぎんいろのや矢のようにはやく、おちました。



そして、
おちていく^こ子どものツルを、
おいぬくと、
くろぐろとつづく^{だいしんりん}大森林の
ま^{うえ}上あたりで、
九十九羽^{きゅうじゅうきゅうわ}のツルは、
さっとはねをくんで、
いちまいの^{しろ}白いあみ
となったのです。



すばらしい^{きゅうじゅうきゅうわ}九十九羽のツルの
きよくげいは、みごとに、
あみの^{うえ}上に、
子どものツルをうけとめると、
そのまま^{そら}空へ
まいあがりました。



氣をうしなった、子どものツルを、
ながい^{あし}足でかかえた、せんとうのツルは、
なにごともしなかったように、
みんなに、いいました。
「さあ、もとのようにならんで、とんでいこう。
もうすぐだ。がんばれよ」